

平成8年度
(1996)
第36回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌稲雲

【 専門委員長 寸評 】

男子団体戦は予想通り圧倒的強さを誇る札幌藻岩高校が5年連続17回目の優勝を飾った。見事の一言につきる快挙である。試合内容もほぼパーフェクトに近いもので、札幌藻岩高校の強さはこれまでと比べても出色の感がある。2位の札幌旭丘、3位の旭川北・札幌光星もよく善戦した。

女子団体は札幌稲雲高校が初優勝を飾った。2月の全国選抜大会で2勝してベスト16入りした自信がプレーの随所に出ており、実力が安定してきた。函館白百合は昨年引き続き準優勝となり、優勝の難しさを改めてかみしめることになった。

個人戦の男子は札幌藻岩の強さに圧倒され、同校すべての全国大会への出場権を獲得した。女子は松永が2連連続優勝で、また、高崎が3年連続準優勝で全国大会へ出場した。

団体戦・個人戦共にシードが順当な勝利をおさめたものとなった。

【 全国大会 】

札幌藻岩高校は、実力が認められ、第4シードとなり、前評判通り第3位に入賞した。第1シードで優勝した渋谷幕張は圧倒的強さを見せつけたものの、S1で個人戦シングルスに優勝した岩見（渋谷幕張）と吉川（札幌藻岩）の試合はすばらしいものであった。1-1で打ち切りとなり、改めて全国的プレーヤーとしての吉川を印象づけた。札幌藻岩は2回目の第3位となったが、今回は前回より実力としては上と思われる。

女子は全道初優勝の札幌稲雲が健闘した。2回戦で大応援団を擁する地元の東海大甲府に2-1で退け、続く3回戦で三重県の宇治山田商業と対戦した。しかしロブを主体とする戦法を攻略できずに涙を呑み、ベスト16に留まった。

個人戦においても、シングルスで吉川（札幌藻岩）のベスト8、杉村（札幌藻岩）のベスト16、また、吉川・杉村組（札幌藻岩）のダブルスのベスト8は立派の一言につきる。

個人戦シングルスの松永は体調が悪く1回戦で敗退したのは残念、高崎は3回戦まで進出し、実力通りの力を発揮した。

男子は実力を十分発揮し、女子は少し実力を発揮できなかった感がある。

（ 専門委員長 横山 俊之 ）

優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

我々、藻岩高等学校男子硬式テニス部は、全道大会で5年連続17回目の優勝という成績で全国大会への出場権を獲得しました。特に去年は全国大会で団体ベスト8に入った事もあり、練習で常に、全国大会を想定して、集中してやっていたので、全道大会では日頃の練習の成果がでたのだと思います。

全道大会の試合内容としては、団体戦で、全試合を通して相手に許したゲームは1ゲームと完璧な内容でした。個人戦は、全国出場選手が全員藻岩高校の選手で占めることができました。このような良い成績を収める事ができたのは、日頃全員が課題を持ってまとまって練習することで鍛える事ができた団結力と各選手が練習中で、苦悩や努力をした結果が出たと思います。さらに、忘れてならないのが指導して下さった緒方監督、OBの皆さんが常に後押しして下さった事です。

全道大会の優勝で、一日一日、積み重ねてきたことがそのまま結果に出ることが改めて分かったので、これからも一所懸命練習して、全国大会で団体ベスト4以上を目指したいと思います。

(札幌藻岩高校 主将 伊藤 剛)

優勝のよろこび

女子 札幌稲雲高等学校

私達にとって、「優勝」という言葉そのものがほとんどなじみのないものでした。創立してから13年目の札幌稲雲高校では、全ての部活動を通して、全道大会の団体優勝は初めてですし、札幌地区大会でも、昨年秋の新人戦で私達が勝ったのが最初でした。

大会前、テニス雑誌では、「優勝候補の筆頭」のようなことが書かれていましたが、一度も優勝経験のない私達がチャレンジャーであることに変わりはなく、「攻めの気持ちを忘れないこと」を心掛けて、一戦一戦頑張ったのが結果につながったのだと思います。そして、苦しいときも、いつも笑いながらテニスを楽しもうとしたことが良かったのだと思います。

今でも夢のような気がします。でも、夢に浮かれてばかりもいられません。

初のインターハイでは、何とか1勝することを目標に、もう一度心を引き締めなければなりません。

私達、札幌稲雲高等学校テニス部には、まだ「伝統」と呼べるものが何もありません。でも、今回の優勝とインターハイ出場が、未来の伝統を作る大切な第一歩となったと思います。そして、これが部の歴史の気紛れな1ページとなったりしないように、私達の後を引き継ぐ新チームに大きな期待を寄せているのです。

部旗の書かれた私達のモットーは「WITH ALL YOUR CONCENTRATION」甲府では、全ての集中力を傾けて戦います。

(札幌稲雲高校 主将 藤山 知美)

全国高校総体（第86回全国高等学校庭球選手権大会） 山梨

8月1日～7日

山梨県小瀬スポーツ公園テニス場
甲府市緑が丘スポーツ公園テニス場

男子	個人戦シングルス	優勝	岩見 亮（渋谷教育学園幕張）
女子	個人戦シングルス	優勝	小畑 沙織（富士見丘）
	ダブルス	優勝	占部 奈美・小畑 沙織（富士見丘）

山梨インターハイ 参加報告

札幌稲雲高等学校 佐藤振一郎 佐々木雄介

（札幌支部顧問会議への報告書）

角を^た矯めて牛を殺す

この3年生達が入学してきたとき、全国大会への出場など誰が予想しただろう。もちろん彼女たちの頑張りを疑うものではない。しかし、彼女たちの2年半には、様々な幸運がいつも味方していたように思う。そんな幸運と、札幌地区という安定したレベルでの切磋琢磨、さらには多くの先生方のご指導に支えられて実現したインターハイ出場のご報告をここに申し述べることで、身に余る光栄とそのご恩の一端に報いることにもなれば幸いである。

1 北海道地区のレベルについて

男子・札幌藻岩のベスト4入りという活躍について、緒方先生のご指導と選手諸君の健闘に対しては賛辞を惜しまない。しかし、この快挙については新聞等で周知のことでもあり、私が改めてご報告するまでもないと思うので、ここでは女子についてだけ触れることにしたい。

甲府入りを前に、私たちは東京の聖ドミニコ学園に立ち寄って練習試合を行った。近所

には松任谷由実の邸宅もある世田谷の瀟洒な住宅地に位置するこの学校は、東京都でも富士見丘、藤村、共栄のビッグ3に続く第2グループ筆頭の実力校である。既に3年生は引退して新チームになってはいたものの、秋季大会に向けて意欲的な練習に励んでいた。顧問の高田先生のご厚意で、ダブルス、シングルスを取り混ぜ、補欠やマネージャー枠で連れて行った生徒まで試合を組んでいただいた。「せめて1勝でも」と思って臨んだところが、予想に反して十分に戦えるのである。聖ドミニコ学園が新チームであることを差し引いても、私たちにとっては出来過ぎの内容だった。

甲府に入ってから、星稜（石川）、栗東（滋賀）、県立岐阜商など、各県の代表チームと練習試合を行い、互角以上の成績を残して本番に臨むことが出来た。

8月2日の団体戦では愛媛の済美をくだして勝ち上がってきた地元山梨の東海大甲府と2回戦で対戦した。ダブルスの岸上・田中が6-2、シングルス1の高橋が6-3で取り、シングルス2の藤山がタイブレークの末6-7で落としたものの、インターハイ初勝利を何とか2-1でものにすることができた。続く3回戦の相手は三重の宇治山田商業。春の選抜大会でも3回戦で涙を呑んでいるだけに、ベスト8入りに賭ける思いは相当のものだったけれど、こちらはあえなく0-2（2-6、1-6）で敗退。どんなに力強く打ち込んでも、深く正確なロブを返してくる宇治山田商業に手も足も出なかった。

練習試合も含めた今回の遠征を通して実感したことは、北海道の女子の実力が、低く見積もっても全国の平均以上のところにあるということだった。ここで札幌稲雲の実力をことさらに誇示しようなどとの思いは毛頭ない。ただ、これまで札幌清田と札幌静修によってリードされてきた北海道の女子のレベルが、想像していたよりずっと高いところまで引き上げられていることは間違いないのだ。

一方で、暑さに対する対策が不十分であったことは私たちの今回の反省材料の一つであるが、それにつけても、直射日光の照り返しで40度を優に超える炎天下、男子・札幌藻岩の戦いぶりは、どんなに賞賛しても余りある大健闘だった。

2 ジュニア出身の選手について

地元の高校生による審判に対しては、春の選抜大会同様、頭の下がる思いがした。高校生のやることでもあり、多少のミスジャッジは避けられない。しかし、しっかりと指導を受けた毅然たる態度と、はっきり大きな声で発せられるコールやアナウンスは、見ていて清々しい思いにさせられた。しかし、団体戦のトーナメントが進み、上位の対戦になるにつれて、特に女子の会場でいくつかのトラブルを目にした。それはジャッジに対する選手からのクレームが大半なのだが、目に余るものも少なくなかった。大声を出して詰め寄ったり、中には審判員を叱りつけるような言葉を吐くものまでいた。

女子団体戦の決勝では、選手の抗議によって、試合が長時間にわたってストップする場面があった。観客席まで届く強い口調で発せられる選手の言葉は、ボールのアウト、インのジャッジに関わるもの。食い下がる選手に対して、“当然のことながら”アンパイアの女子生徒は絶対に判定を覆そうとはせず、押し問答は10分以上に及んだ。そしてとうとうアンパイアは下を向いて何も言えなくなってしまったのだ。泣き出してしまったようにも見えた。急遽、大会運営の教員が審判台に登って試合を再開させる始末。いかに心を強く持ち、毅然とした態度を続けていたとしても、相手はプロを目指そうという全国にも知

られた有名選手である。泣き出して審判を続けられなくなったアンパイアを責めることは私にはできないのだ。決勝戦の審判を任されるほどだから、彼女はよほど信頼厚い選ばれた生徒であるに違いない。もしかすると、どこかの高校でキャプテンをしているような生徒かもしれない。そんな彼女が長期間にわたって練習を重ね、晴れのインターハイ決勝の審判台に上ったのである。あまつさえ「一人一役」を合い言葉にした無償の奉仕であったことは言うまでもない。そこであんな経験をさせられては、二度とテニスなどやりたくなくなってしまうのではないかと心配になるのだ。

星の数ほどいるプロの仲間入りを幸運にも果たしたとして、どれほどの選手になるのか私にはわからないが、仮に百歩譲ってクレーム通りのミスジャッジがあったとして、その1ポイントと、アンパイアの彼女が心に受けた傷の深さを比較する気には到底なれないのである。

角を矯めて牛を殺す、という故事がある。幼い頃からテニスという角をいびつなまでにねじ曲げて強化してしまった一部の有力選手たちは、本来スポーツを通して学ぶべき大切なものを見失っているように思えてならないのだ。巨大に張り出したテニスという角の重みで、若者らしい健全な人間性やデリカシーまで殺してしまうのでは、何のためのスポーツなのかわからないのである。

3 雲の上の高さ

遙か遠くに見えていた雲の上の世界。それは甲府に滞在中、一度だけ顔をのぞかせてくれた富士山のようにあまりにも高く、たった1回のインターハイ出場によって、その頂きに一步でも近づけたなどとは夢にも思わないのである。しかし、雲の上が遙かに高いことに変わりはないまでも、そこがどんなに高いところなのかを知ったことだけで大変有意義な収穫であった。この貴重な経験に対し、顧問として、深い感謝の念を禁じ得ない。

(札幌稲雲高等学校 顧問)